

## 海坊主の海想記

# セグロチョウチョウウオー反省をこめて

丘に上がった海坊主



この魚はとっても綺麗な魚で、数いる熱帯魚の中でも5本の指に入る代表的な魚である。私の大好きな魚の一つだ。

上品な色のお腹と、くっきりと色分けされた黒い背中。実物を見た方は、派手な色じゃないけど、大胆なデザインに目を奪われる事だろう。

海の中では、昼間あれほど沢山の種類の魚が、水中に浮いて遊んでいるのに、夜はほとんどの魚は、隠れ家に入り眠っている。サンゴ礁では、小さな穴やくぼみなど、隠れるところが沢山あり、スズメの仲間や、小さな幼魚はまず見えない。

捕獲するとなると、どうしても大きめの魚に偏ってしまう。しかし、観賞用魚としては、出来れば小さいほうが良い。

運賃の問題や水槽の大きさの問題もある。それより何しろ、売りやすいし、餌付きがいい。魚生が短い分、環境変化に対応しやすいのか、早く大きくなろうとするのか、そういう魚が多い。

逆に成魚になると、警戒心は強くなり一口も餌を食べずに死んでしまう奴もいる。

何年か、夜の海を潜っていると分かるのだが、この地形にはこの魚、あの地形にはあの魚と、案外寝座が色分けされる。

セグロチョウチョウウオもどこを泳いでも、寝ているというものではない。

「今日は、セグロの家<sup>や</sup>に行こうな」と、カマジーが言う。

石垣島で3度目に泳いだ、夜の海が川平だった。

この辺のイノー（リーフの内側）は石垣島の西側には、珍しく水深が浅く、サンゴも生きていて、濁りも少なく、綺麗な海だ。冬は、イカやクブシミ、タコなども良く獲れる。

泳ぎ始めて、5分。いるいる！ 確かに言っていた通り、ツブルサー（塊状ハマサンゴ）の下に夫婦仲良く寝ている。

早速、網を手に取り捕獲。しかし、2匹くっついて寝ているので、もう1匹は、どうしても逃げてしまう。

今度は、カマジーがイーグン（鉞）の先で、そうっと2匹を引き離してくれた。その間に獲るのだ。驚かさなければ、熟睡しているせいか逃げていかない。

コツをつかむと、難なく一人でも二匹共獲れるようになってくる。

2時間ほど泳ぐと、籠の中はセグロでいっぱいになっていた。確かに、ここはセグロの家<sup>や</sup>だ。

しかし、熱帯魚獲りはこれからが一仕事。いや、本仕事。

アイスボックス（魚を持って帰る入れ物）に入れる海水を汲まなければならない。20リットルのポリタンクを両手に持ち、傾斜のついた砂浜を20m程も運ぶのだ。疲れきった体と夜の暗さで、何度も膝をついてしまう。

そして今度は、バケツで4～5匹ずつ転ばないように丁寧に魚を運ぶ。

50～60匹の魚を運ぶのに、大漁の喜びなど微塵もなかった。

途中で“もう逃がすか”と思うくらい、難儀だった。

三つのアイスボックスの中は、満員電車のような状態だった。

「そんなに、入れて大丈夫かな？」と、カマジーが言った。

僕は「家まで40分ほどだし、酸欠にならないように、水を少なめにして揺れば、大丈夫じゃない」と思った。

家について、ボックスを開けてみた。

“よっし！ みんな生きている”思った通りだ。

60匹ほどの魚を、水槽に移し終えたのは、夜中の2時をまわっていた。

疲れ果てた体は、満足感と相まって、すぐに夢の世界に入ってしまった。

翌日、水槽には見事なセグロたちが泳いでいた。

“明日には、餌でもあげてみるか”と、1日中ニコニコしながら、彼らを眺めていた。

ところが、2日目の朝だった。水槽を見て、血の気が引いた。ほとんどの魚が体中真っ赤になるほど、出血していたのだ。目まで充血させて、息使いは荒く、とても苦しそうだった。

水を入れ替えたり、薬を入れたり、いろいろやってみた。

しかし、夕方には、みんなひっくり返っていた。

全滅！ だった。

未熟な考えで無理をしたせいで、魚同士で擦れ合い、体中に傷を負ってしまったのだ。あ～～あ、全て自分のせいだ。

合掌。

このセグロ事件の後、本当に落ち込んでいた。その落ち込みに、追い討ちをかけたのは、何回か同じ場所を泳いでからである。あの時あんなにいた、セグロが明らかに少ない。

その頃、熱帯魚獲りは、自分しかやっていなかったはずである。他の人間が獲っていないのに減っている“これはヤバイな”そんな実感が、日々つのっていった。

“場所を替えれば、いっぱいいるさ~”と、自分を慰めていたが、何しろ、他の海のレパートリーは無い自分であった。また、師匠であるカマジも、崎枝や川平以外の海は、あまり行きたがらなかった。

同じ海を、泳げば泳ぐほど、そんな、不安が心に積もっていった。

何年かして分かったような気がするけど、食用にする獲物は（主にリーフの外）生活範囲が広く、深いところや他の海域からも移動しては寝ている。

そのいい例が、よく海人が言うこの言葉。

「一度獲物を獲ったところは、覚えておけ。また同じ種類の魚が来て、眠るから」である。この事は私自身でも実証済みである。

ところが熱帯魚やイノーで暮らす生き物は、その生活範囲は驚く程狭く、ほとんど移動しないで一生を終えているのではないか？ と思えるのである。それだけ、人間の目に留まる、獲られる可能性が大きい。

もちろん、一生のサイクルも短いかもしれないが、その元を（親）獲ってしまっちは、残す子供さえも生まれてこない。

“このままでは？”そんな考えが熱帯魚から気持ちが離れていった原因の一つになっていたのかもしれない。

今では、飼育器具や飼育方法も確立してきているので、難しいサンゴの仲間やイソギンチャク等も水槽で飼育できるようになった。

だからといって、これも同じことで一度獲ってしまえば、そこにはもういなくなるのである。まして移動しない生き物には顕著にその影響が見て取れるはずだ。

また、その個体だけの問題ではなく、それによって生かされている生き物にも、大きな影響が生じることだろう。

10年海人をやっている、食用の魚もまったく同じで、年々漁が減っていくのが分かった。

今でこそ、問題になっている、サンゴ礁の大規模な死滅。

その頃も、オニヒトデや、赤土の流出で、水は濁りサンゴは日々死んでいった。残骸となったサンゴの骨は、次第に砂に埋もれ、砂漠状態になり、小さな魚がいなくなり、それを捕食する魚も見えなくなっていった。

当時の海人は、確かに産卵期も構わずに魚を獲っていたかもしれない。

しかし、電灯潜りだけを考えても、懐中電灯で照らし出される、獲物はごく僅かな範囲であることは、明らかである。

環境変化によって、生き物が枯れていく映像の方が、私の心には、強く焼きついている。

先輩海人もその事は感じていて、「この海は、もうダメよ~ サンゴがみんな死んでいるからヨ~。去年までは、あんなにエダサンゴが綺麗だったのに」と言う。

2~3年して、セグロの家の海を、泳いだとき、私は、罪悪感に襲われた。あんなにいた、夫婦で寝ていたセグロが、一匹も見えなかったのである。

（熱帯魚獲りは既にやめていたが）

開発される野山、埋め立てられる海、大規模なサンゴ白化現象、漁業資源の枯渇。

丘に上がって20数年経つが、そんなニュースを耳にするたびに、その思い出が私の心を痛めつけている。